

国語

注 意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙は表紙を入れて十一ページあり、解答用紙が一枚、中にはさんであります。
- 3 受検番号は、解答用紙及び問題用紙の決められた欄に記入しなさい。
- 4 答えは、問題の指示に従って、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 5 監督者の「やめ」の合図ですぐにやめなさい。

受検 番号	
----------	--

1

次の1〜3の問いに答えなさい。

1 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は仮名に直して書きなさい。

(1) 早朝にギョセンが出港する。 (2) 相手をウヤマウ。

(3) 抑揚をつけて話す。 (4) 貴重品を先生に預ける。

2 次の——線部のカタカナを漢字で書くとき、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

(1) 風にあおられてタイセイをくずす。

ア 大勢 イ 体制 ウ 体勢 工 大成

(2) 課題の解決をハカル。

ア 諮 イ 図 ウ 計 工 測

3 次の行書で書かれた文字について、楷書で書かれたものと比較したとき、点線で囲まれた①〜④の部分の行書の特徴として最も適当なものを、あとのア〜エから選び、記号で答えなさい。

伝統を尊ぶ

- ア ①の部分は、筆順が変化している。
- イ ②の部分は、点画が連続している。
- ウ ③の部分は、点画を省略している。
- エ ④の部分は、直線的になっている。

2

山田さんは、物語の読解について考えるために次の文章を読んでいます。これを読んで、あとの1〜6の問いに答えなさい。

では、文章を読んで心が動くというのはどのようなプロセスなのでしょう。感情が強く生起する場合と、そうでもない場合があるのはなぜなのでしょう。このカギは物語の世界への「移入」にあるようです。移入とは、物語の世界をまるで現実の世界であるかのように感じ、物語の中での出来事に集中する経験のことです。移入状態になったとき、読み手の心は大きく動くのだと考えられます。

物語の読解についてさまざまな研究をした^(注)グリグは、物語に移入するプロセスを「旅」の比喻で表現しています。読み手は旅人であり、もともといた世界から少し離れたところに旅に出ます。旅に出ると、もとの世界にいつもどおりアクセスすることはできません。

旅人は、どこかしら変化した状態でもとの世界に帰ってきます。

これは読み手の移入を大変うまく表している比喻だと言えます。読み手は物語の世界に入り込むと、物語の中の状況を鮮やかに「目に見える」ように感じ、その分、現実世界での出来事に注意がむかなくなり、この状態を示す例としては、時間の感覚が分からなくなって周囲で起きていることに気が付かなくなることが知られています。夢中で読んでいたらあつという間に日が暮れていた、とか、友人に呼ばれているのに気が付かなかつたという経験がある人もいるのではないのでしょうか。「もとの世界にいつも通りアクセスすることができない」というわけです。

^(注) もとの世界にいつも通りアクセスすることができない、というのは、表象を構築する段階にも影響してきます。移入しているときにも文章の表象を構築しようとする点は共通なのですが、状況モデルを構築するときに現実世界の知識が参照されにくくなるのです。そのため、現

実世界では矛盾するような出来事が起こってもそれを矛盾ととらえずに表象を構築していくことができます。ファンタジー小説を読んでいるときに、「いや人が生き返ることはないよね」と急に冷めたりせず、「生き返ったんだ、よかった!」と思えるのは、移入によって現実世界の知識との整合性を保とうとしないで済むからです。逆に、なにか入り込むことができないなど感じるときには、現実世界の知識との矛盾が気になるはずですが、「展開が非現実的でちっとも面白くない!」と感じる物語もありますが、これはその物語には自分が移入できないということの表れでもあるのです。

小説を読むのが好きだという人は、頻繁に移入を経験しているのではないかと思います。移入という現象は、物語やフィクションに限定されるわけではありません。ですが、典型的には移入は物語を読んだときに生じる現象だと言えます。これは **b**、説明文の多くが現実世界を理解することを目的として書かれるのに対して、物語が現実から離れた別の世界を記述しているということによるものでしょう。自分が小説を夢中になって読んでいるとき、文章の中の世界は単に「そこに書かれた情報」ではなく、自分自身を取り巻く世界を構成しているように感じられます。読解は、書かれた情報を頭の中で再現して表象を作ることだ、とお話ししましたが、ゲリグが「旅」になぞらえて説明したように、移入は、その再現された表象の世界に自分を投影し、旅をさせることなのです。

もう一つのカギは同一化です。同一化は、物語の登場人物をまるで自分のように感じることで、これも物語によって心が動かされる大きな要因となります。登場人物にどこか自分に通じるところがあると思ったり、「分かるなあ」と感じたりすることで、物語の世界の旅人として自分を位置づけられるのだと考えることができるでしょう。同じ物語展

開であったとしても、年齢や境遇など、自分と似ているところが多い登場人物が出てくるときのほうが、物語によって心を動かされやすくなることは知られています。これは同一化による影響だと考えられます。自分と全く似ていない登場人物（例えば「未来世界の天才科学者」のような人物を想像してみてください）であっても、その人が友人関係に悩んでいたようなエピソードを見ると、同一化が促進されてより心が動かされやすくなります。推理小説などで天才的な探偵（シャーロック・ホームズ）には同一化しにくいけれど、周辺の登場人物（ジョン・ワトソンや依頼人）に同一化できるというような場合もありますね。移入と同一化はそれぞれ異なる概念ですが、物語の世界に入り込んだ状態になっているときは、移入状態で同一化していることが多くあります。私達が強く心を促されるときには、このような物語の世界に入り込んだ状態になることが重要な役割を果たしているのです。

物語に入り込むことで、私達は物語という架空の世界でリアルな感情を経験します。物語の中には、非現実的な体験（竜の背中に乗って空を飛んだり、魔法を使って世界を救ったり）だけでなく、歴史上の人物の人生の体験（キング牧師もヒトラーも）や、現実的ではあるけれども実際の自分とは違う人の体験（老人や幼い子ども）が描かれています。実際の自分にはない特徴を持った人の経験や感情を想像することは難しいものですが、物語に移入し同一化することで、それらの人物の置かれた状況や感情を体験することが可能になります。これは、異なる人生をシミュレーションしている状況だといえるでしょう。ゲリグは、物語を読むことを旅に喩え、人が物語によって変化する、とも述べていました。これはどういうことでしょうか。旅は人を成長させる、というのはよく言われることです。これまでに見たことのない風景を見たり、様々な人に出会うことで、感動したり、これまでに

は持ったことのない感慨を抱いたり、ものの見方が変わったりするところが成長につながるのでしょう。これは物語でも同じだ、というのがゲリグの言いたいことです。旅に出る前の人と帰ってきた人では考え方が違っているのと同じように、物語を読む前と読んだあとで考え方が変わっていることがあります。旅が人を成長させるように、物語が人を成長させるということです。まさに私たちは、物語を使って「自分の枠を広げ」ているのです。

(犬塚美輪『読めば分かるは当たり前?』による)

(注) ゲリグ＝研究者の名前。

表象＝筆者は本文より前の部分で、「目の前にはないものについて頭に浮かぶものすべてを「表象」と呼ぶ」と述べている。

お話しましたが＝筆者は本文より前の部分で、読解力の定義について述べている。

1 〰️線部「この」と同じ品詞のものを、本文中の〰️線部ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

2 本文中の a・b にあてはまる語の組み合わせとして、

最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア (a) つまり b (まるで) イ (a) または b (けっして)

ウ (a) しかし b (さらに) エ (a) そして b (おそらく)

3 山田さんは、この文章の中で述べられている物語の読解について、ノートにまとめました。次の「フート」の□に入る内容を二十字以内で考えて書き、「フート」を完成させなさい。

「フート」

物語の読解について

○移入とは

頭の中で再現した□によって、その世界を現実の

ように感じ、物語の中の出来事に集中する経験のこと。

○同一化とは

物語の登場人物をまるで自分のように感じること。

4 物語に移入しているときの読み手の状態について、筆者の考えを

説明したものと最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 物語の世界で現実世界との矛盾を感じる事が起こると、整合

性が気になり、集中することが難しくなる。

イ 物語の世界で現実世界と整合性が保たれていないことが起こっ

ても、矛盾と捉えずに物語を楽しむことができる。

ウ 物語の世界での知識が正しいと思いついてしまうと、現実世界

での出来事に関心をもつことが難しくなる。

エ 物語の世界で現実世界と共通した矛盾を感じる出来事が起こる

と、物語の世界をさらに深く味わうことができる。

5 次は、この文章を読んだあとの、先生と山田さんたちの会話です。

□に入る内容を、八十字以内で補い、会話を完成させなさい。

山田さん 「筆者は本文で物語の読解について、ゲリグの「旅」の
比喩を引用していたね。」

原口さん 「そうだね。物語を読むことには、旅と同じような効果
があると述べていたね。」

山田さん 「つまり筆者は、□と考えているんだね。」

先生 「比喩が用いられていることで、筆者の考えがよりわかりやすく理解できましたね。」

6 本文の論理の展開について説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 物語を読むために必要な「移入」「同一化」について批判的に論じたあと、筆者の主張する理想の読書のあり方を提案している。

イ 私たちが入り込める物語とそうではない物語について、「移入」「同一化」の二つの観点から比較し、最後に結論を示している。

ウ 物語を読むときに経験する「移入」「同一化」について説明したあと、読み手が得られる物語の読解の効果について述べている。

エ 私たちが物語を理解する過程を「移入」「同一化」の視点から解説し、物語をより深く読み味わうための方法を紹介している。

問題は次のページに続きます。

3 次の文章を読んで、あとの1〜3の問いに答えなさい。

ある修行者しゆぎやうじや、行き暮れて、わづかなるあやしのしづの屋に、一夜宿（道を行くうちに日が暮れて）（身分の低い人のささやかな家に）

を借りける。主情あまじけ深き者にて、結縁むすびにとて貸しける。ころは冬ざれ（時期は荒れて寂しい冬の

の霜夜（霜の降りる夜）なれば、手足ごごえてかがまりければ、わが息を吹きかけてあ

たためけり。ややあつて後、熱き飯を食ふとて、息をもつて吹きさま

しければ、主①この由よしを見て、（注）「あやしき法師のしわざかな。つめたき

物をば熱き息を出だしてあたたため、熱き物はひややかなる息出してさ

まし侍はべるぞや。いかさまにもただ人のしわざとも見えず。天魔（悪魔が現れての現じ

きたれるや」とおろかにおそれて、②暁あけがたにおよびて追ひ出しぬ。（どう見ても）

そのごとく、至いたつて心つたなきものは、わが身に具足ぐそくしたることを（このように、極めて至らない者）（備わっている）

だにもわきまへず、（注）ややもすれば惑まどひがちなり。これほどの事をだに

わきまへぬ（注）やからは、能事よきを見てはかへつて悪あししとや思ふべき。か

ねてこれを心得よ。これは、うち聞けば、おろかなるやうなれども、

人の世にあつて、道に迷へる事、かの主が、人の息の熱きとぬるきと、

わきまへかねたるにことならざるものなり。（違わないものである）

（注） 結縁むすび|| 善い行いをして仏と縁を結ぶこと。

あやしき|| 異常な。

やから|| なかま。連中。

『伊曾保物語』による

1 線部「わづかなる」を現代仮名遣いに直して書きなさい。

2 線部①「この由を見て」とありますが、家の主は何を見たのですか。次の文の [] に十字以内の現代語を補い、文を完成させなさい。

修行者が []、手足をあたためたり、飯をさましたりしている様子。

3 次は、線部②について話し合っている先生と鈴木さんたちの会話です。I・II に適当な言葉を補って、会話を完成させなさい。ただし、I は本文中から十一字で抜き出し、II は【IIの選択肢】から最も適当なものを選び、記号で答えることとします。

鈴木さん 「主はどうして修行者を追い出したのかな。」

高橋さん 「修行者の行動を見て、普通の人ではない悪魔だと恐れ

たからだよ。」

野村さん 「本文には、主が I をわからなかったことを「おろ

か」だと書かれているね。」

鈴木さん 「確かに、本文にあるように、現代でも II ことが

あるよね。」

先生 「古典に表れたものの見方や考え方の中には、長い年月を経てなお現代と共通するものがありますね。」

【IIの選択肢】

- A 冷静に行動することができず、誤解を招いてしまう
- I 善悪を判断することができず、対応が遅れてしまう
- U 相手に気を遣うことができず、配慮に欠けてしまう
- 工 道理を理解することができず、判断を誤ってしまう

4 次の文章を読んで、あとの1〜4の問いに答えなさい。

高校二年生の千春は、夏休みに父親の郷里の村を訪れ、祖母と過ごしている。祖母は若い頃仕立て屋で働き、客のフランス人にフランス語を教えてもらったことがあるという。ある日、夏祭りに行った帰りに、千春は満天の星を見上げながら、夏の大三角を祖母に教えた。

「千春ちゃん、くわしいのね」

「一応、中学で天文部だったから。天体観測したり、文化祭でプラネタリウムを作ったりもしたんだよ」

「本格的ね。だからよく知ってるんだ」

感心されると、照れくさい。

「わたしなんか、全然たいしたことないよ。先輩とか友だちとか、もつとずっとすごいもん」

千春が中一のときに部長をつとめていた三年生の先輩は、大学で天文学を専攻しているそうだ。那彩は工学部の宇宙物理学科を第一志望にしている。ゆくゆくはロケットの開発にかかりたいという。

「千春ちゃんも、大学ではそういうことを勉強するの？」

「どうかなあ」

千春はため息をついた。

「よくわかんなくて、わたし」

おばあちゃんが首をめぐらせ、千春と目を合わせた。続きをうながすように、浅くうなづく。

「友だちはみんな、けっこうちゃんと考えてて。ロケットほど具体的じゃなくても、将来こういう仕事をしたくて、だったらこの学部、みたいなの。あと、趣味とか得意なことをのびしたいって子もいる」

尻すばみに声が小さくなっていく。

「でもわたしは、そういうのも思いつかない。どうしたらいいんだろ」
おばあちゃんは黙って考えこんでいる。夜道に響くふたり分の足音が、カエルの鳴き声とまじりあう。

「ごめん、なんか、愚痴みたいになっちゃった」

われに返って、千春はややまった。孫からいきなりこんなことを言われたって、おばあちゃんも困るだろう。

もやもやした気持ちをここまで正直に口に出したのは、はじめてかもしれない。「どうしよう」と友だちと冗談めかして言いあうことや、両親に聞かれて「考え中」とごまかすことはあっても、こんなに心細げな口ぶりにはならなかった。

この不安は、伝わらない気がするのだ。特に、おとなたちには。

進路が決まらないと言うと、誰もが励ましてくれる。好きなようにやりなさい、とお父さんとお母さんは言う。じっくり考えたらやりたいたいことが見つかる、と担任の先生は言う。皆さんの可能性は無限度ですよ、と塾の講師は言う。

みんな、前向きだ。千春のためを思い、背中を押そうとしてくれる。そうわかっているのに、足が動かない。

「おばあちゃんには、よくわからないけど……」

おばあちゃんが言葉を探すように口ごもった。千春を元気づけようと考えてくれているのだろう。心配させてしまったかもしれない。

もう弱音を吐くのはやめよう、と千春はひそかに決意した。ありがとう、がんばるよ、と笑って話を切りあげよう。

口を開きかけたとき、おばあちゃんが言った。

「大変ねえ」

親身な、労わるような口ぶりだった。思いがけないひとことに面食らい、千春の返事は少し遅れてしまった。

「うん。ちょっと大変」

反省したばかりなのに、^①本音が口からこぼれた。

「今の若いひとは、選ばなきゃいけないんだものね。しかも、選択肢は山ほどあるし」

そうなんだよ、とうなずきかけて、はっとした。

おばあちゃんは、選べなかつたのだ。千春と同じ年頃るとき、なにをやりたいか、なにになりたいか、自分では決められなかった。たったひとつの選択肢を受け入れて、そこでがんばるしかなかった。

「なにかを選ぶって、むずかしいことよね」

おばあちゃんの^{ふね}声音はやわらかい。千春は恵まれているとたしなめたり、ぜいたくな悩みだと責めたりする気配は、まるでない。

それでも——だからこそよけいに、かもしれない——千春はにわか
に恥ずかしくなってきた。

「こんなことじゃだめだね、わたし」

意識して、声を張った。

^②「もつと、しっかりしないと」

千春は若いころのおばあちゃんみたいに、経済的な困難に直面しているわけじゃない。^注ヒナタみ^注たいに、大切な家族を失ったわけでもない。それなのに、こんなふうにくすぐず落ちこんだりして、情けない。

「千春ちゃんはしっかりしてるじゃないの」

「そんなことはないよ。夢とか将来の目標とか、別にないし」

しまった、また後ろむきなことを言っちゃった。くちびるをかんだ千春の顔を、おばあちゃんがのぞきこんだ。

「あのね、若いひとを相手に、こんな言いかたはよくないかもしれないんだけど」

あらたまって言われ、千春はおそるおそる問い返した。

「なあに？」

「夢や目標って、どうしても必要なもの？」

どういう意味か、一瞬わからなかった。

「必要、じゃない？」

少なくとも、これまで千春はそう教わってきた。小学校でも中学でも、卒業文集に「将来の夢」を書いた。たぶん高校もそうだろう。

「もちろん、具体的な夢や目標があるのは、すばらしいことだと思う」

おばあちゃんは言葉を選ぶかのように、ゆっくりと言う。

「めざすものがあれば、やる気も出るしね。でも、ないならしないで、無理やり考えなくたっていいんじゃない？」

ひよいと腕をのばして、行く手を指さす。

「夢や目標って、よく山のとっぺんにたとえられるけど」

千春も正面に目をやった。星空を背に、くろぐろとした山影がそびえている。

「最初から、あそこをめぐって登っていくひともいる。だけど、特にそう決めてたわけじゃなくて、目の前の道をてくてく歩いてたら、いつのまにか高いところまで来てたってこともあるんじゃないかな」

「いつのまにか？」

「それはそれで、楽しそうじゃない？ 途中でお花畑に行きあたったり、めずらしい鳥を見かけたりもするかも。気がむいたら、道草し
たっていいし」

「道草、かあ」

千春にも、なんとなく理解できる気がした。

頂上をめがけて一直線に、よそ見をせずに上っていくほうが、きつと早い。でも、のんびり歩いて、時には立ちどまって、道端に咲く野の花に目をとめたり、林の奥から響いてくる小鳥のさえずりに耳をす

ましたりするものも、悪くいかもしれない。

「夢や目標があってもなくても、経験したことは自分の中に残るからね」

それが、いつかどこかで、思わぬかたちで役に立つこともあるだろう。おばあちゃんのお裁縫や、フランス語みたいに。

(瀧羽麻子『かわせみのみちくさ』による)

(注) 仕立て屋Ⅱ衣類を縫って作ったり縫い直したりする店。

那彩Ⅱ千春の同級生。

ヒナタⅡ祖母の家の近所に住む小学生。昨年、母親をなくしている。

1 線部「たしなめたり」について、ここでの意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア はぐらかしたり イ うらやんだり

ウ 皮肉を言ったり エ 注意を与えたり

2 次は、線部①について話し合っている生徒たちの会話です。

Ⅰ・Ⅱに適当な言葉を補って、会話を完成させなさい。

ただし、Ⅰは本文中から三字で抜き出し、Ⅱは十五字以内でふさわしい内容を考えて書くこととします。

林さん 「千春がおばあちゃんに対して本音をこぼした理由を調べてみよう。」

原さん 「千春はこれまで両親にも先生にも自分の悩みを言っていないかったよね。」

西さん 「周りの大人たちは皆Ⅰなことしか言わないから、千春は自分の不安や悩みを言っても伝わらない気がしているのだからね。」

谷さん 「それに対して、おばあちゃんがⅡから、千春は戸惑って、つい本音を口にしてしまったのだからね。」

3 線部②における千春の心情を説明したものととして、最も適当

なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 同じ年頃のときの祖母と比較すると自分は非常に恵まれた状況にいるのだと気がつき、祖母を思いやることができず自分自身にいらだち、強い嫌悪感を抱いている。

イ 若い頃の祖母に比べると自分の悩みは取るに足らないものだと感じ、祖母に弱音を吐いたことがいたたまれなくなり、気持ちを切り替えようと心を奮い立たせている。

ウ かつて苦労を経験した祖母の気持ちを考えて行動できず、自分の気持ちを押しつけてしまい祖母から責められたため、自分の未熟さを痛感して激しく落ち込んでいる。

エ 経済的な苦しみや家族を失う悲しみを乗り越えた人と自分を比較し、自分の状況はあまり深刻ではなく、思い悩む必要はないと考え、不安が薄れ、希望を抱いている。

4 林さんは、千春に起きた心情の変化について、ノートにまとめました。次の「ノートの一部」の□に入る内容を、七十字以内で考えて書きなさい。

ノートの一部

祖母の考えを聞く前

- ・ 具体的な夢や目標は、必要なものである。
- ・ 夢や目標が決まっている方がよい。

←

祖母の考えを聞いた後

- ・ □と考えは始めている。

5 前田さんの学級では、授業で「鹿児島県の産業の活性化」というテーマでグループごとに発表することになりました。次は、「農業の活性化」というテーマで発表する前田さんのグループの【発表の構成案】と【話し合いの記録】です。これを読んで、あとの1〜4の問いに答えなさい。

【発表の構成案】

発表内容	スライドの内容
① 県の農業を活性化させるために、県産の農畜産物（「かごしまブランド」）を積極的に食べることや、認知度を上げることが提案する。	提案内容を提示する。
② 県産の農畜産物を食べることは、消費者にメリットがある。 ・県内で生産されているので、輸送する時間が短く、より新鮮なまま店頭に並ぶ。 ・県独自の安心・安全の基準を満たしている。	生産者から消費者に届くまでの過程を示す。 消費者のメリットを箇条書きで挙げる。
③ 消費者が県産の農畜産物を食べることは、生産者にもメリットがある。 ・生産地と消費地が近いと、輸送する時間が短く効率的になる。 ・遠くの消費地へ出荷する場合と違って、販売方法の制限が少ない。	生産者のメリットを箇条書きで挙げる。
④ 「かごしまブランド」マークを紹介する。	マークを提示する。
⑤ 鹿児島県の農業産出額は、全国で二位（令和五年度）である。県にとって重要な産業を守り続けるために、「かごしまブランド」を選ぶことや認知度を上げることが提案する。	全国二位であることと、特に生産の多い農畜産物を示す。

【話し合いの記録】

前田さん 「まず、構成案について何か意見はありますか。」

山本さん 「初めに提案内容を提示してはいますが、この前に、聞き手の興味を引きつける内容を入れるとよいと思います。」

小川さん 「山本さんの発言に、意見があります。県の資料で見ただけですが、「かごしまブランド」マークの県内における認知度は、令和五年度の調査で約五十%でした。認知度の低さに驚いて、興味をもつ人が多いと思います。」

前田さん 「では、マークの紹介とともに、認知度の低さを示して、初めに聞き手の興味を引きつけるようにしましょう。」

青木さん 「そのほかの部分についてですが、私は消費者の利点よりも生産者の利点を先に示す方がよいと思いました。」

山本さん 「なるほど。しかし、聞き手は学級のみならず、つまり消費者です。消費者から見たメリットを先に示す方がよいのではないのでしょうか。」

青木さん 「私は「農業の活性化」というテーマを踏まえて考えました。」

山本さん 「確かに、農業の活性化には、生産者が農業を続けられる環境を整える必要がありますね。生産者の利点を先に挙げる方がよいかもしれませんね。」

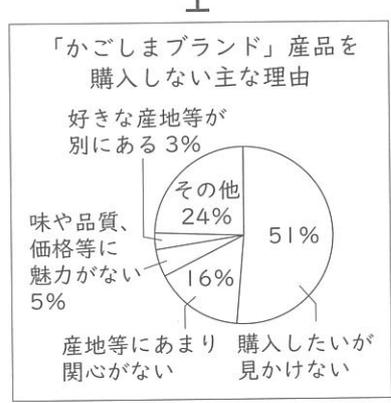
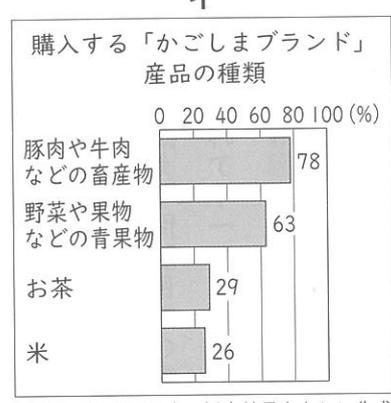
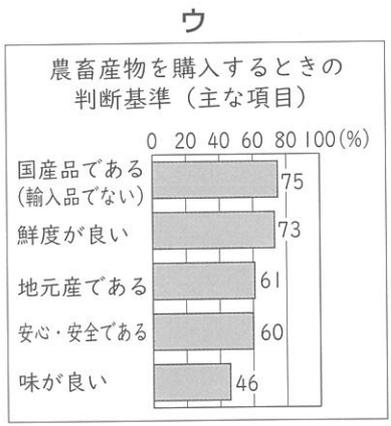
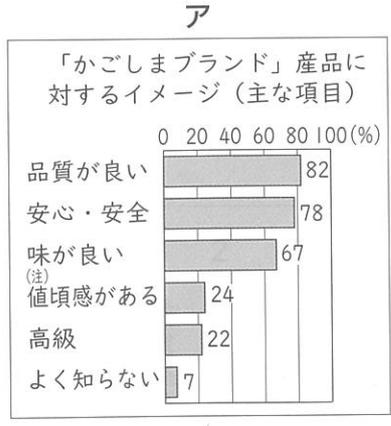
前田さん 「では、構成は決まりましたね。ほかに、発表内容やスライドの内容について、何か意見はありますか。」

小川さん 「②の発表に、もっと説得力のある資料を追加したいです。県産の農畜産物のよい点が消費者の求めることに合っていることを伝えられるとよいと思いました。」

青木さん 「⑤の「かごしまブランド」の認知度を上げる取り組みについては、もっと具体的な提案が必要だと思います。」

1 線部①の山本さんの発言についての説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 青木さんの発言を受け止めて考察しなおし、同意している。
 イ 青木さんの主張を整理して、根拠を引き出そうとしている。
 ウ 自分と青木さんの発言内容を比較し、違いをまとめている。
 エ 一つ前の自分の発言について、詳しい説明を補足している。
 2 線部②の小川さんの発言を受けて用意した資料として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。



(鹿児島県令和5年度「県産農畜産物(かごしまブランド)の認知度」調査結果をもとに作成)
 ※ ア・イ・ウは複数回答のため割合の合計が100%を超える。エは四捨五入しているため割合の合計が100%とならない。

(注) 値頃感＝価格がちょうどいい、または安いと感じること。

3 話し合いの結果、発表の構成はどのように変わりましたか。発表内容の□①～□⑤を正しく並べ替えて答えなさい。

4 線部③の「認知度を上げる取り組み」について、前田さんたちは話し合っていて、広報の方法について次の案を出しました。これらの案に基づいて、あなたならどのような具体的な取り組みを提案しますか。あとの(1)～(3)の条件に従って書きなさい。

【前田さんたちの案】

- A 販売している店の店頭での広報
- B SNSでの広報
- C 各種イベントでの広報
- D 新聞・雑誌での広報
- E 県の広報紙・県ウェブサイトでの広報

条件

- (1) あなたが考えを述べたい項目を【前田さんたちの案】のA～Eから一つ選び、□①に書くこと。
- (2) □②は、二段落で構成し、六行以上八行以下で書くこと。
 - ・ 第一段落には、□③を選んで理由として、その方法のよい点を書くこと。
 - ・ 第二段落には、□④の方法を使って行いたいことについて具体的に書くこと。
- (3) 原稿用紙の使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。

国語解答例

大問	配点										小問	解答例		
1	14点										1	(1)	漁船	
			4点		8点				(2)	敬(う)				
			2点		2点		2点		(3)	よくよう				
			2点		2点		2点		(4)	あず(ける)				
			2点		2点		2点		(1)	ウ				
			2点		2点		2点		(2)	イ				
			2点		2点		2点			ア				
			2点		2点		2点			エ				
			2点		2点		2点			オ				
			2点		2点		2点			カ				
2	26点										5	イ	人は物語を読み、移入し同一化することによって、現実世界では経験できない状況や感情を物語の世界で体験し、心を強く動かされ、考え方が変化し、成長することができる	
			3点		3点		3点		3点				エ	物語の表象の世界に自分を投影すること
			3点		3点		3点		3点				ウ	物語の表象の世界に自分を投影すること
			3点		3点		3点		3点				ア	物語の表象の世界に自分を投影すること
			3点		3点		3点		3点				イ	物語の表象の世界に自分を投影すること
			3点		3点		3点		3点				エ	物語の表象の世界に自分を投影すること
			3点		3点		3点		3点				オ	物語の表象の世界に自分を投影すること
			3点		3点		3点		3点				カ	物語の表象の世界に自分を投影すること
			3点		3点		3点		3点				キ	物語の表象の世界に自分を投影すること
			3点		3点		3点		3点				ク	物語の表象の世界に自分を投影すること
3	13点										2	I	わが身に具足したること	
			4点		4点		4点		4点			II	エ	わが身に具足したること
			4点		4点		4点		4点				ウ	わが身に具足したること
			4点		4点		4点		4点				ア	わが身に具足したること
			4点		4点		4点		4点				イ	わが身に具足したること
			4点		4点		4点		4点				エ	わが身に具足したること
			4点		4点		4点		4点				オ	わが身に具足したること
			4点		4点		4点		4点				カ	わが身に具足したること
			4点		4点		4点		4点				キ	わが身に具足したること
			4点		4点		4点		4点				ク	わが身に具足したること
4	21点										4	イ	将来の夢や目標を無理やり決めなくても、悩んだり、予定外の体験をしたりしながら、経験を積み重ねていくことが自分の将来につながっていくだろう	
			4点		7点		7点		7点			II	エ	思いがけない言葉をかけてくれた
			4点		7点		7点		7点			I	ウ	思いがけない言葉をかけてくれた
			4点		7点		7点		7点				ア	思いがけない言葉をかけてくれた
			4点		7点		7点		7点				イ	思いがけない言葉をかけてくれた
			4点		7点		7点		7点				エ	思いがけない言葉をかけてくれた
			4点		7点		7点		7点				オ	思いがけない言葉をかけてくれた
			4点		7点		7点		7点				カ	思いがけない言葉をかけてくれた
			4点		7点		7点		7点				キ	思いがけない言葉をかけてくれた
			4点		7点		7点		7点				ク	思いがけない言葉をかけてくれた
5	16点										4	ア	④ → ① → ③ → ② → ⑤	
			3点		2点		2点		2点				ウ	④ → ① → ③ → ② → ⑤
			3点		2点		2点		2点				エ	④ → ① → ③ → ② → ⑤
			3点		2点		2点		2点				オ	④ → ① → ③ → ② → ⑤
			3点		2点		2点		2点				カ	④ → ① → ③ → ② → ⑤
			3点		2点		2点		2点				キ	④ → ① → ③ → ② → ⑤
			3点		2点		2点		2点				ク	④ → ① → ③ → ② → ⑤
			3点		2点		2点		2点				ケ	④ → ① → ③ → ② → ⑤
			3点		2点		2点		2点				コ	④ → ① → ③ → ② → ⑤
			3点		2点		2点		2点				カ	④ → ① → ③ → ② → ⑤